ESVS 38th annual meeting 参加報告

九州医療センター　血管外科　　松原裕

2024 年 9 月末、記録的な残暑が続く福岡を発ち、約 24 時間かけてポーランドの旧都クラクフに到着。今朝の気温は 1 桁、半袖で来てしまったことを後悔したのは一瞬で、日中は暖かく快適な気候だ。空港から市内へ向かう電車の車窓からは、秋の装いへと変化を遂げた草木が広がり、日本のそれと同様である。クラクフの街はほどよい都会で、高層ビルは目立たない。中心部には世界遺産であるヴァヴェル城や聖マリア聖堂が立ち並ぶ旧市街が残り、観光名所となっている。また、負の遺産として世界遺産に登録されたアウシュビッツ強制収容所も近郊にあり、華やかな旧都の町並みとあわせて当時の東欧の社会事情を感じることができる。

チェックインまで時間がかなりある。バスターミナルに向かうと、発車直前のアウシュビッツ行きバスを発見し飛び乗った。残念ながらスーツケース片手に館内に入ることはできず、柵の外から周囲を散策して見学した。今となっては、アウシュビッツ周辺は普通の住宅地であり、学校や商店など日常的な生活が送られている。帰りのチケット購入はポーランド語対応であり、わからず戸惑っていると、地元の中学生くらいの女の子が助けてくれた。ポーランドの若者には英語が通じるらしい。

学会会場は旧市街から歩いて 10 分くらいの所にある。会場の規模は今年の日本血管外科学会が開催された別府ビーコンプラザよりもコンパクトだ。その中に欧州中の血管外科医が集結するのだから、熱気と密度がすごい。シンポジウムが中心、ハンズオン形式のワークショップが多い、ポスターは掲示がなくディスプレイを用いたデジタル発表が 1 箇所あるのみという点が日本と異なる。採択率が低く、発表の機会が得られるだけで光栄であるというのも納得がいく。競争社会で勝ち残った選ばれし研究のみが採択されるだけあって、発表内容は RCT や前向き観察研究ばかりであった。日本のように競争が少なく、ある意味共産主義な環境では、国際競争で勝てる研究者は育たないだろうと感じた。

私は今回、第 52 回日本血管外科学会で発表した研究が最優秀演題に採択され、ESVS の Best abstract session で発表する機会を頂いた。英語での発表であったが、英語を母国語としない欧州での発表であったため、各国の訛りを拝聴でき、私も Japanese English を披露した。発表した研究内容は、坐骨神経の萎縮が CLTI 患者の肢予後不良因子であるという、後ろ向き研究だ。質疑応答では思いのほか多くの質問を頂き、座長からは「坐骨神経なんて聞いたことないけど、これまでに報告はあるのか？」と聞かれたが、「ない。当院の麻酔科医が坐骨神経ブロック中に CLTI 患者の坐骨神経は細いと言っていた。」と答えた。素晴らしいアイデアを下さった麻酔科の先生に感謝だ。同じセッションで発表された他の研究は RCT や多施設前向きレジストリを用いた研究であり、後ろ向き研究を発表したことに恥ずかしさを感じた。欧米では臨床での疑問は RCT に問うシステムが構築されているようだ。

日本で実現するには、研究費の獲得や情報セキュリティ、煩雑な倫理委員会、統計専門家の雇用など課題が山積みである。

自分の発表を終えた後は、ESVS の若者の会である EVST 主催の PAD トライアスロンを見学した。欧州の若手血管外科医が手術、EVT、知識を競う大会だ。日本でも JAST 主催の PAD トライアスロンを開催し、優勝者を EVST に派遣するなど交流を深めている。ぜひ JAST ホームページ（https://jsvs-jast.com/）、インスタグラム（https://www.instagram.com/Jast_vascular_surgery/）をフォローして頂きたい。今後は研究面でも国際交流を深めることで、研究の質や国際学会での存在感を高めていくことに期待したい。

このような機会を頂いた日本血管外科学会のみなさま、並びに日頃から御指導賜り快く海外へ送り出して下さった九州医療センター血管外科の小野原先生と古山先生に厚く御礼申し上げると同時に、益々の発展を祈念して報告の結びとさせて頂きます。

JAST
JSVS | Academy and Surgical Training

JAST_VASCULAR_SURGERY